

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 英語教授学領域  
氏名 長友 隆志

【論文題目】 日本人高校生のライティング方略・メタ認知・自己効力感を育成するための  
英作文の指導と評価

【授与する学位の種類】 博士（文学）

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、高校において、教師が学習者の英作文への効果的な FB（フィードバック）を行うとともに、メタ認知、自己効力感、ライティング方略の使用の向上度を検証・評価し、今後の英作文指導への研究的・理論的・教育的示唆を提示することが研究目的である。

序章では、今後の高校での英作文指導における、エラーの修正とともに、学習者の認知的・心理的側面の変化に関する研究の必要性を述べ、次の RQ(リサーチクエスション)を提起している。RQ 1. 教師からの FB により、学習者の自己効力感、メタ認知、ライティング方略はどのように変化するのか、またそれらはどのように関連し合っているのか。RQ 2. 自己効力感やメタ認知を高め、ライティング方略の効果的使用を促す励ましやエラーコードを用いた FB に効果があるかどうか。RQ 3. 自己効力感、メタ認知、ライティング方略の観点からの FB の効果が、学習者の英語習熟度によってどう異なるのか。

第 1 章の事前調査では、高校生へのアンケート調査の結果、FB を受ける学習経験が不足している状況が判ったとして、励まし・賞賛やエラーコードによる教師からの FB を行う必要性と意義を述べている。

第 2 章の先行研究では、自己効力感、メタ認知、ライティング方略の理論的背景、足場かけ(scaffolding)としての FB の方法論・効果、学習ジャーナルによるメタ認知的振り返り等について文献研究を行い、本論文の方向性を示している。また、研究方法として、混合研究法、ケーススタディ、GTA(Grounded Theory Approach)等のレビューを行うとともに、妥当性のある研究(分析)方法の方向性を明らかにしている。

第 3 章の予備的研究では、教師の FB によりメタ認知が活性化し、エラー修正に至るプロセスの中で、自己効力感、ライティング方略の使用が相互に強化されたことが確認された。また、自己効力感、ライティング方略のアンケート尺度の内容的妥当性を先行研究等に基づいて検証し、クロンバック  $\alpha$  により信頼性の確認を行った。このように、予備的研究による事前の検証・確認を十分に行っている点は評価できる。

第 4 章では研究方法を記述している。クラスター分析を使用し、英語の習熟度によりクラスを 3 つのグループに分けた。教師は学習者への励ましを行いつつ、エラーコードを使用した暗示的 FB により自らエラーを修正させ、その後、明示的 FB により修正内容を確認させる英作文の活動を実施した。また、学習者は自らの学習プロセスを振り返り、結果を学習ジャーナルに記録した。自己効力感・ライティング方略のアンケート、ライティングテストの事前・事後の有意差の分析(Wilcoxon の符号付順位和検定)、各アンケートとライティングテスト間の相関分析(Spearman の順位相関係数)を量的分析として行った。質的分析では、GTA とテキストマイニング(KH Coder)による分析結果を比較・統合する GTMA(Grounded Text Mining Approach)を活用し、GTA としては戈木版 GTA(2005)を独自に取り入れて、学習ジャーナルのデータを分析した。また、ケーススタディとして、各グループから 1 名を選び、教師からの FB、学習ジャーナルの記述、インタビューの結果を突き合わせて、時系列の変化、グループ間の比較等の詳細な質的分析を行った。

第 5 章の分析結果では、量的分析の結果、自己効力感、ライティング方略の事前・事後の有意差があり、上位グループほど、自己効力感、ライティング方略、ライティングテストの結果間に強い相関が見られた。

また、GTMA による質的分析の結果からも量的分析と同様の結果が得られ、メタ認知についても向上したことが判った。さらに、多様な量的・質的データを用いた並行的トライアングレーション(三角測量)アプローチによる混合研究法の活用に加えて、GTA によるデータの再コーディング、研究参加者が分析結果を確認するメンバーチェック、他の研究者による分析結果の検証であるピアディブリーフィングにより内的妥当性を確保するとともに、分析結果の厚い記述により外的妥当性を担保している点は評価に値する。

第 6 章の考察において、上記の RQ1 に関しては、FB によりメタ認知が向上することで、ライティング方略の使用が促進され、自己効力感が高まったとしている。RQ2 については、励ましやエラーコードを用いた FB が、自己効力感・メタ認知を高め、ライティング方略の効果的使用を促したと述べている。RQ3 については、習熟度の高いグループは、メタ認知・自己効力感の向上により自ら修正可能であったが、習熟度の低いグループは、メタ認知・自己効力感は向上したが、自ら修正できる部分が少なくなる傾向

があったとしている。先行研究と比較した結果、学習者の習熟度にかかわらず、自己効力感が高まったことは、管見では本論文独自の成果であるといえる。

終章において、混合研究法による分析を踏まえて、新たな英作文指導のモデルを構築・提示している点は、理論的な示唆としての意義があるといえる。また、新学習指導要領に準拠した高校英語教科書のタスク分析の結果、学習者同士のFBが多いことが判ったとして、今後は教師からのFBによりメタ認知等がある程度向上した後に学習者同士のFBを導入することを、教育的示唆として具体的に提案している。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

### 【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成27年1月26日(月)に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文における研究の目的・方法・結果・意義及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切に行われ、申請された学位論文が博士(文学)の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

### 【審査委員会】

主査 山下 徹

委員 合田 美子

委員 平野 順也

委員 渡邊 功

委員 パウアー トマス